

# 南北分断を異郷の地で乗り越えた「連立展」 ——知られざる在日朝鮮人の美術展を解明する

白 凛（大阪経済法科大学  
アジア太平洋研究センター）

キーワード：南北朝鮮、在日朝鮮人、美術、展覧会

## はじめに 半島の分断と在日朝鮮人

2018年4月27日に南北首脳会談が開催された。大韓民国（以下「韓国」とする。）の文在寅大統領と朝鮮民主主義人民共和国（以下「共和国」とする。）の金正恩国防委員長両首脳の一挙手一投足が世界の注目を浴び、リアルタイムで配信された。今回の首脳会談は2007年12月に持たれた会談以来11年ぶりのトップ会談であった。2000年6月にも首脳会談があり、「6.15南北共同宣言」が発表されたが、ここでの「我が民族同士」の理念の影響力と効力はこんにちも維持されている。

日本による植民地支配、解放後の分断国家の樹立、そして朝鮮戦争と分断の固定化により、朝鮮半島の傷口は深々と刻まれ、既に70年以上が過ぎている。この治癒されることなく続いた朝鮮半島の歴史と在日朝鮮人の歴史は、その歩みを共にしてきており、在日本大韓民国民団（以下「民団」とする。）<sup>(1)</sup> と在日本朝鮮人総聯合会（以下、「総聯」とする。）<sup>(2)</sup> との対立も南北対立の歴史と同様長期にわたっている。朝鮮半島の南北に異なる理念で国家が存在した

ことや、東西冷戦の世界情勢を背景に、民団と総聯は少くない場面で意見を異にし、時に激しく対立した<sup>(3)</sup>。しかし常に両団体が対立しあっていたわけではない。1972年、「7.4南北共同声明」発表直後、総聯傘下の組織と民団傘下の組織が共同で会合を開いている。また1991年3月の冬季競技大会と、同年4月から5月にかけて千葉で開催された世界卓球選手権大会に、朝鮮半島南北の選手が統一チームとして参加した際、これを総聯と民団が共同で歓迎、応援した。また、既述の2000年の6.15共同声明から5年後、総聯と民団が5.17共同声明を発表し、「我が民族同士」の理念を受けて総聯と民団の和解が目指された。両団体の「同胞が置かれている状況と体験の共通性」<sup>(4)</sup> がこの共同声明の発表の原動力となっていた。

このように朝鮮半島の分断の事実を日本に住む朝鮮人も積極的に克服しようとの思いで、いくつかの行事が開催されてきた。本稿では、その中の一つである「連立展」を取り上げる。「連立展」はこれまで関係者のあいだでは、そういう画期的な試みがあったと伝わるだけの、いわば伝説的な美術展であった。実際これまでいくつかの論文で「連立展」について論及されているが<sup>(5)</sup>、その全貌が描かれることはなかった。はたして「連立展」とは何だったのか。どのような経緯で、いつどこで開催されたのか。

(1) 1994年に在日本大韓民国民団から改称した。略称「民団」。「連立展」開催時点では、「居留」が名称に入っていた。

(2) 朝鮮民主主義人民共和国の海外同胞組織である。註7の在日本朝鮮人連盟、その後の在日朝鮮統一民主戦線（1951年1月結成）を経て、1955年に結成。略称「総聯」。

(3) 1959年12月に始まる在日朝鮮人の共和国への帰国事業では真っ向から対立するなどした。

(4) 呉圭祥「総聯と民団の歴史的な和解と和合についての一考察」『統一評論』2006年、87ページ。『記録・朝鮮総聯60年』（呉圭祥、私家版、2015年）264ページも参照。

どのような団体・個人が企画したのか。どのように報道され、どのような反響があったのか。こうした詳細は約半世紀の間、分断された歴史の闇に埋もれていたが、筆者が収集した当時の史料をもとに解明し、本稿で初めてその実態を明らかにする。

第1節では朝鮮の解放から「連立展」開催までの在日朝鮮人美術家の様子を概観する。第2節では「連立展」開催の経緯、開催期間と会場、参加団体、出品者、出品作品などにかかわる詳細な情報を、当時の史料を基に整理する。第3節では「連立展」の反響と影響、そしてその後の動きも整理し、「おわりに」でまとめる。なお、朝鮮語／韓国語文献の日本語訳は筆者が行なった。

## 1 「連立展」開催への道程

「連立展」が開催されることになった直接の契機は1960年に韓国でおきた4.19革命<sup>(5)</sup>である。1960年3月の不正選挙反対闘争を皮切りに、4月19日にはソウルの全大学生が決起し、最終的に李承晩政権を覆した。革命のいきさつは日本に随時伝えられ、在日朝鮮人も関心を持って経緯を見守った。

既知のことであるが、第二次世界大戦終結直

後の日本には約200万人の朝鮮人がいたが、その大半が帰郷する一方、約四分の一が日本に残った。解放後まもなく朝鮮半島南部から再び日本に渡航する者もあり（例えば、1948年に済州島で起きた4.3事件などが背景にある）、彼らも含め約60万人の朝鮮人が日本で生活するようになった。彼らは、みずからのルーツである朝鮮半島に常に関心を抱きながら日々を過ごした。

植民地からの解放直後の日本で1945年に総聯の前身である在日本朝鮮人連盟<sup>(7)</sup>が、1946年に民団の前身である在日本大韓民国居留民団<sup>(8)</sup>が結成された。前者は共和国を、後者は韓国を支持することになるのだが、出身地が北側であるのかあるいは南側であるのかにかかわらず、個々人の意志でどちらかの団体に属したし、あるいはどちらの団体の方針にも共感しない人たちもいた。この両団体、あるいはどちらにも属さない美術家らが共同で開催したのが本稿で扱う「連立展」である。

### 1-1 「連立展」前史

先にも記したように、「連立展」はこれまでほとんど論じられることがなかったが、「在日朝鮮人の美術研究を進めるにあたって、筆者がこの10年あまり依拠してきた資料である『在日朝鮮美術家画集』(以下『画集』とする)<sup>(9)</sup>から、

(5) 『解放後 在日朝鮮人運動史』(朴慶植、三一書房、1989年、402-406ページ)には1960年から1962年までの文化人の活動についての記述があるが、「連立展」の説明は多くはない。また『「在日朝鮮人文学史」のために—声なき声のポリフォニー—』(宋恵媛、岩波書店、2014年、238ページ)には「五月の銀座画村松画廊での連立展を経て、祖国平和統一南北文化交流促進在日文化人会議が発足した」と「連立展」について触れられているが、これ以上の言及はない。『民団70年史』(2017年、在日本大韓国民団)及び呉圭祥『記録・朝鮮総聯60年』(2015年)には言及が見当たらなかった。

(6) 同年3月15日に行われた第四代大統領選挙が不正に行なわれたことが発端となった。慶尚南道馬山市で不正選挙に民衆が抗議したことからはじまり、4月には大学生らもデモに立ち上がった。19日にソウル大学の学生を始め、ソウル市内の学生らが総決起し、一般市民も賛同した。デモはソウルにとどまらず各地に波及。4月末には李承晩が下野し、13年にわたる独裁政権に終止符が打たれた(尹景徹『分断後の韓国政治—1945—1986』木鐸社、1986年、169-195ページ)。

(7) 1945年10月結成。在日朝鮮人の民族団体。1949年9月に日本政府により強制的に解散させられた。略称「朝連」。

(8) 1946年9月結成。大韓民国の公認団体。1994年に「在日本大韓国民団」に改称。

(9) 在日本朝鮮文学芸術家同盟美術部、1962年1月発行。この画集には、28人の在日朝鮮人美術家の作品65点が収録されている(カラー印刷15点、白黒印刷50点)。このほか「発行の辞」(在日本朝鮮美術家画集編集委員会)、「画集の発行に際して」(在日本朝鮮人総聯合会中央常任委員会)、「画集におくる」(在日本朝鮮文学芸術家同盟中央常任委員会)、「十年間」(松谷彊)、「朝鮮の友へ」(箕田源二郎)、「在日朝鮮美術家の歩み」(編集部)、「収録作家名単」、「画集発行協力者名単」、「編集後記」が収録されている。全100ページあまりの決して分厚いものではないが、在日朝鮮人美術家が編集した最も古い画集であるという点、そして内容の点でも在日朝鮮人美術史を研究するにあたり第一級史料に位置付けている。筆者はこの画集から得られる情報を基に日本全国と朝鮮半島の南北で約40回の聞き取りと一次史料の発掘を行ってきた。

「連立展」が在日朝鮮人美術家らのそれまでの活動のなかでも重要なイベントの一つであったことを読み取ることができる<sup>(10)</sup>。ここでは解放から「連立展」までの在日朝鮮人美術家の活動を、この『画集』から得られる情報を参考に簡潔に整理する。

1947年に最初の美術団体である在日朝鮮美術家協会が、続いて1953年に在日朝鮮美術会が結成されている。前者についての資料は少なく、また現存するものも汚破損が多いため解明が困難であるが、後者については機関誌の分析や筆者の調査からある程度のことが明らかになってきている。調査の過程で、1950年前後にゆるやかな美術家の集まりである大山グループというものがあったこともわかっている。異郷で生きるという共通項で集い、グループを形成した在日朝鮮人美術家は、自分たちにとって創作とは何かを討論しあったほか、共同で美術作品の制作をしていた。1950年代には機関誌の発行や、総会の開催、巡回展などを企画した<sup>(11)</sup>。

他方で日本人美術家らとの接点を持ち続け、日本美術会<sup>(12)</sup>が主催する「日本アンデパンダン展」には1952（第五回展）年から多数出品している。また日本の画壇でも活躍し、二科会<sup>(13)</sup>、行動美術協会<sup>(14)</sup>、自由美術協会<sup>(15)</sup>、日本青年美術家連合<sup>(16)</sup>、日本労働漫画倶楽部<sup>(17)</sup>、日本

版画運動協会<sup>(18)</sup>などにも所属しながら制作と社会との関係について模索していた。

1950年末から1960年代初期、日本人美術家と在日朝鮮人美術家らの共同の活動として特筆すべきものに「日朝友好展」の開催がある。これは先の「日本アンデパンダン展」を通して知り合い意気投合した日本人美術家と、在日本朝鮮文学芸術家同盟美術部（以下、「文芸同美術部」とする。）<sup>(19)</sup>に参加した在日朝鮮人美術家らが共同で開催した展覧会である。同美術展の目的は朝鮮半島の統一と、日朝間の美術交流であった。第一回目は神奈川県川崎駅前デパートの一角で小規模で開催された。この初日が奇遇にも韓国の4.19革命と重なり、美術家たちに少なからぬ衝撃を与えたようで、『画集』にそのことが特記されている。在日朝鮮人美術家らは、1957年ごろから、共通のテーマで作品を制作しようとの討論を重ねていた。当初は「在日朝鮮人の生活」のみがテーマに上がっていたが、1959年には「帰国」が、1960年には韓国の革命を受けて「南朝鮮の救国闘争」が共通のテーマに加わっており<sup>(20)</sup>、4.19革命への関心の高さがわかる。さらに、民団系美術家らと同年年末に忘年会を、翌年の年初に新年会を持ち、その席で共同の展覧会を持つことを決め、これが「連立展」開催へとつながった。

(10) 上記註9の『画集』に収録されている「在日本朝鮮美術家たちの歩み」に、1945年から1962年1月（すなわち『画集』発行）までの彼らの活動略史が記載されており、「連立展」も他の活動と同じくらいの分量を割いて記述されている。

(11) 1950年前後の在日朝鮮人美術家の活動については、拙稿「1950年代の在日朝鮮人美術家の活動ー「在日朝鮮美術会」を中心に」『年報カルチュラル・スタディーズ05』（カルチュラル・スタディーズ学会、2016年）参照。

(12) 1946年に結成され、1947年から日本アンデパンダン展を主催した。日本美術会の綱領は以下の通りである。「1. 民主的美術文化を創造し普及する。2. 美術を人民へ解放しその美術的資質の昂揚をはかる。3. 美術に関する封建的な制度やその因襲を排除する。4. 美術家の自由な創作生活を擁護する。5. 内外の進歩的な文化活動と積極的に提携する」。特に「日展」の再開に反対した。審査のないアンデパンダン展を毎年行なった。日本美術会機関誌『美術運動』第一号（1947年1月発行）参照。

(13) 1915年結成。終戦後の1945年に再組織された。ここから行動美術協会が派生している。

(14) 上記二科会を離脱した美術家が1945年に組織した。反アカデミズムの立場をとる。金昌徳が会員で監査の進行を務めた時期もあった（向井潤吉、難波香久三編『行動美術三十五年の小史』行動美術協会、1980年、219ページ）。

(15) 1937年結成。宋英玉、曹良奎、高三権などが出品した。

(16) 1953年結成。白玲は結成当初からかかわっていた。そのほか、蔡峻、曹良奎、韓宇英などの名前が機関誌に掲載されている。

(17) 1953年結成。蔡峻や全哲がかかわった。

(18) 1949年結成。機関誌『版画運動』は1949年12月に創刊号が出ている。

(19) 1959年に「在日朝鮮美術会」より改称。

(20) 初公開は同年に開催された「8.15 祖国解放記念美術展」だったようである（『画集』101ページ）。



## 1-2 1950年代の日本の美術事情

本論に移る前に、在日朝鮮人美術家の上記のような活動には、1950年代の日本の美術事情が大きくかかわっている点を指摘したい。日本ではこれまで1950年代の美術を振り返る展覧会がいくつか開催されてきたが<sup>(21)</sup>、鈴木勝雄が述べるように「文化と政治の分かちがたい結びつきへの認識こそが五〇年代の特質をなすにもかかわらず、文化の政治性を語る言葉がとりわけ美術史の領域で貧困」<sup>(22)</sup>であった。在日朝鮮人がたずさわった美術作品や活動があるにもかかわらず、それが顧みられることがなかった理由が、直接的ではないにしてもここにあるのではないかと筆者は考えている。1950年代における在日朝鮮人美術家と日本人美術家の関係は先に述べたように、例えば、日本版画運動協会には呉炳学、朴史林などが、<sup>オ・ビョンハク バク・サリム</sup>「日本アンデパンダン展」には曹良奎、李寅斗などが、<sup>チョウ・リャンギョ リ・インドゥ</sup>日本青年美術家連合（1953年結成）には白玲が結成当初から中心人物として活躍していることが資料から充分伺える<sup>(23)</sup>。日朝友好美術展については、大阪展は金熙麗と大泉米吉を中心に30年以上、神奈川展は白玲を中心に半世紀以上も続いた。

特に第一回神奈川日朝友好展は在日朝鮮人の集住地域で描いた作品を展示しており<sup>(24)</sup>、ルポルタージュ絵画からの影響の可能性も考えられる。

分野は異なるが、文学の部門については在日朝鮮人の作品研究がすでに蓄積されており<sup>(25)</sup>、1950年代の文化活動についても美術のみならずサークルの研究が近年続々と出てきている<sup>(26)</sup>。これらの研究成果を踏まえて、在日朝鮮人の美術研究の未開の部分の丹念に拾いあげること、当該時代の輪郭を描きだす研究発展の一助になればと筆者は考えている。

## 2 芸術家の「統一」を目指した活動の軌跡

ここでは「連立展」を詳細に追う。「連立展」は先に記したように、1950年代に見られたグループの結成、企画展の開催、「日本アンデパンダン展」への出品など創作面において盛り上がりをもせた時期に開催された。参照した資料は前掲『画集』のほか、第一回及び第二回連立展パンフレット<sup>(27)</sup>、『白葉』<sup>(28)</sup>、『朝鮮美術』<sup>(29)</sup>、『京郷新聞』<sup>(30)</sup>、『労働新聞』<sup>(31)</sup>、『民主新聞』<sup>(32)</sup>、『朝

(21) 「1950年代の日本美術―戦後の出発点」展（神奈川県近代美術館葉山、2017年1月28日～3月26日）、「戦後日本のリアリズム1945-1960」展（名古屋市美術館、1998年4月18日～7月12日）などがある。

(22) 鈴木勝雄「はじめに」『実験場1950's』『美術にぶるっ!ベストセレクション 日本近代美術の100年』展カタログ、東京国立近代美術館、2012年、6-7ページ。

(23) 白玲「表現と伝達性」(『今日美術』第2号、日本青年美術家連合機関誌、1953年)など、いくつかの論考が機関誌に掲載された。

(24) 呉林俊「前進する朝日美術家たちの友好」『朝鮮美術』第7号、1960年、50ページ。

(25) 『「在日」と50年代文化運動―幻の詩誌『ヂンダレ』『カリオン』を読む』(ヂンダレ研究会編、人文書院、2010年)など。

(26) 宇野田尚哉、川口隆行、坂口博、鳥羽耕史、中谷いずみ、道場親信『「サークルの時代」を読む―戦後文化運動研究への招待』(影書房、2016年)、佐藤泉『一九五〇年代 批評の政治学』(中公叢書、2018年)、鳥羽耕史『1950年代―「記録」の時代』(河出ブックス、2010年)、『現代思想』2007年12月臨時増刊号、総特集＝戦後民衆精神史(青土社、2007年12月15日)など。

(27) 第一回パンフレットはA4サイズで三つ折りになっている。第二回パンフレットはB4より少し大きいサイズ一枚である。

(28) 白葉同人会機関誌。1957年に創刊号発行。

(29) 文芸同美術部機関誌。1953年に第一号発行。

(30) 1946年創刊。当初は反共・保守の立場であったが1950年代末より反独裁へ。一度廃刊させられるも1960年に復刊。「連立展」報道時はこの復刊後である。

(31) 共和国の朝鮮労働党中央委員会機関誌。1945年11月1日創刊。

(32) 在日本大韓民国家居留民団の機関誌。『朝鮮新聞』(1946年3月10日創刊)、『新朝鮮新聞』、『民団新聞』、『韓国新聞』と改称し、1996年から『民団新聞』。

(33) 1945年10月10日創刊。『民衆日報』、『解放新聞』、『朝鮮民報』と改称し1961年から同名称。

鮮新報』<sup>(33)</sup>、『朝鮮時報』<sup>(34)</sup>など「連立展」開催時の1961年に発行されたものである。引用を多く扱っているのは、史料自体が当時の状況を物語っており、それを生かすためである。

第2節の前半では、開催経緯と開催期間、参加団体について、第一回連立展と第二回連立展に分けて記述する。後半では出品者と出品作品を整理した。

## 2-1 第一回連立展の開催経緯、開催期間、参加団体

『画集』によると、第一回連立展は民団と総聯に所属する美術家たちが席を共にした1960年の忘年会と翌年の新年会でその方針が決まった。同展パンフレットに開催趣旨が掲載されている。やや長いが全文を引用する。

解放後すでに十六年の歳月がすぎりましたが、わたしたちの祖国は依然として南北に分裂されたままであり長い歴史にわたって築かれた、わたくしたちの文化は統一的に発展しえないでいます。

民族がことなり、国家がことなっているが、相互の往来がさかんな今日、わが民族はいまだ南北にわかれたままあい会うこともできなければ、書信さえかわすことができない状態がつづいています。

異国の地にありながら、わが民族文化の開花を念願してやまないわたくしたちは、このような状態を坐視することができず、さきに祖国の平和統一と南北の文化交流を促進するための大文化祭をもよおし、また今日ここに政見、信仰、所属の如何を問わず在日美術家の総意によって美術展を開き、祖国の平和統一の一日も早からんことを願うものであります。

さいわいにして、このささやかな美術展をここに持つわたくしたちの誠意が、内外の多くの平和を愛する人々の賛同を得、あらゆる

外部勢力の干渉のない、わが民族同志の自主的な平和的統一を達成する上において、また南北の文化交流を促進し、祖国の文化芸術の統一的発展を早める上において、何等かの力になれば、光栄これにすぐるものはありません<sup>(35)</sup>。

この文には、朝鮮半島の分断状態により民族文化の発展が遅れ、通信さえ途絶えていることへの歯がゆさが綴られており、異郷に住んでいるが朝鮮半島の平和統一の実現と文化芸術の統一的発展に貢献すべくこの美術展が開催されるという内容が述べられている。

参加団体についてパンフレットには「主催：在日韓国白葉同人会美術部、在日コリア美術家協会、在日本朝鮮文学芸術家同盟美術部」と書かれてあり、当時の新聞記事には、

こんどは連立美術展

総聯、民団の美術家たち 5月1日～5日・村松画廊

(中略) この連立美術展は昨年末ごろから在日本朝鮮文学芸術家同盟美術部(代表=韓宇英)、白葉同人会美術部(代表=洪久城)、コリア美術協会(代表=郭仁植)などを中心に在日同胞美術人たちの接触と交流が深まる中で結実したもの<sup>(36)</sup>。

と書かれてある。この記事やパンフレットから「連立展」に三団体が関わっていたことがわかる。また、在日本朝鮮文学芸術家同盟美術部(=文芸同美術部)の代表は韓宇英、白葉同人会美術部の代表は洪久城、コリア美術協会の代表は郭仁植だということがわかる。文芸同美術部は在日本朝鮮人総聯合会の傘下団体で1959年に結成された。この前身は「1-1」で述べたように在日朝鮮美術会(1953年結成)である。「白葉同人会」と「コリア美術協会」については、『白葉』15号に次のような記述がある。

(34)『朝鮮新報』日本語版として1961年発行開始。

(35)「連立展」パンフレット、1961年作成。

(36)『朝鮮時報』1961年4月29日付。

コリア美術協会、初の展覧会

郭仁植、洪久城、金泰伸、三同人を中心とするコリア美術協会が、はじめての展覧会を九月に開催する。目下、三氏とも製作に大童、酷暑をものともせずキャンパスにいどんでいる。三氏の傑作を期待しよう<sup>(37)</sup>。

ここから郭仁植がコリア美術協会の代表でありながら、白葉同人会美術部にも属していたと考えられる。また白葉同人会の機関誌『白葉』の編集に郭仁植、洪久城、キム・テシン金泰伸の三者ともかかわっていたことから、コリア美術協会と白葉同人会の違いが、筆者のこれまでの調査では判然としなかったが<sup>(38)</sup>、どちらかが民団系で、どちらかが中立系であろう。それぞれの代表者については他の出品者の情報と一緒に後半で詳述することとし、以下で開催期間を整理する。

連立展

総聯、民団、中立層 美術家

思想、団体の違いを超えて、朝鮮民族三千万人の願いである祖国の自主的平和統一を達成するために、(中略)、総聯、民団、中立層の美術家たちも、来る5月1日から5日まで、東京 銀座 村松画廊にて連立展を開催することとなった。(中略)これに先立ち、美術家たちは、18日に開催された「祖国平和統一、南北文化交流促進文化祭」にも積極的に参加し、(中略)、友情と連帯のもと、連立展の準備を成功裡に進めている<sup>(39)</sup>。

(傍線筆者)

これを見ると、第一回連立展は村松画廊にて5月1日から5日まで開催されたことがわかる。またこれに先立ち、4月18日に「祖国平和統一、南北文化交流促進文化祭」が開催されたという

こともわかる。この「祖国平和統一、南北文化交流促進文化祭」とはどのようなものだったのだろうか。

常設委設けて運動をより拡大

内外に大きな反響呼んだ共同文化祭

祖国の平和的統一と南北文化交流を促進するという共通の目的のもと、解放後初めて総聯、民団側の文化芸術家たちが、手を取り合って開催した共同文化祭は、在日同胞からはもちろん、国内外から大きな反響を得ている。(中略)共和国においては(中略)今回の文化祭の成果を高く評価し、《労働新聞》社説をはじめ、諸新聞、ラジオでも広く報道しており、南朝鮮の新聞でも(中略)《民族自主統一中央協議会》において在日同胞のこのような動きを全面的に支持し、大きな期待を寄せるという声明を発表した<sup>(40)</sup>。

(傍線筆者)

この記事から文化祭の目的が、「祖国の平和的統一と南北文化交流を促進」することであり、開催意義について「解放後初めて総聯、民団側の文化芸術家たちが、手を取り合って開催した」と指摘している。また、文化祭の内容が朝鮮半島の南北で報道されていることもわかる。韓国の『京郷新聞』と共和国の『労働新聞』では次のように報じられた。

南北系接触頻繁

共同文化祭美術展覧会等開催

【東京十八日発合同】(中略)去る3月末在日韓国人記者団と、朝鮮人言論協会<sup>(41)</sup>が共同声明を発表したあと、南韓、北韓を支持していた各種団体間の接触が盛んに行われている。4・19一周年になる十八日、東京の「トラノモン・

(37) 「風見どり」『白葉』15号、1960年8月15日、白葉同人会、27-28ページ。

(38) コリア美術協会に関して『民主新聞』(1960年9月21日付)にも「好評のコリア美協展 感動呼ぶ力作」という見出しの記事がある。六人によるグループ展だったようで、郭仁植、洪久城、金泰伸の名前がある(そのほかの三者は文字がつぶれており判別できなかった)。

(39) 『朝鮮新報』1961年4月27日付。

(40) 『朝鮮新報』1961年4月29日付。

「クボコウドウ」において在日文化人が主体となり、“平和統一南北文化交流促進文化祭”を開催した。

(中略)

同文化祭では呼びかけ文も採択された。内容は次のようである。

(一)我々は一切の外勢干渉のない我々民族同士、自主的な平和統一のために努力する

(二)南北間文化交流を促進し、三・一節、八・一五のような民族的な記念日を共同で開催することとし、民族文化芸術の統一発展のために努力する

(三)南北間文化芸術家たちの交流のために努力する

(四)民族の事業について南北間で相互に協商することと、民団、朝総聯は互いに協力し、三・一節、八・一五のような民族的祝日を共同記念することを願う

このような内容の声明を採択した後、準備委員郭仁植氏は“五月一日から東京で共同の南北系美術展を開催することとなりました。このような文化祭は大阪でも開催する予定である”と述べた<sup>(42)</sup>。

(傍線筆者)

ここから、第一回連立展が「祖国平和統一、南北文化交流促進文化祭」の後に開催されたこと、開催地は虎ノ門の久保講堂だということがわかる。また呼びかけ文が採択されたこと、この準備委員に在日朝鮮人美術家である郭仁植がかかわっていたこともわかる。郭は先述のとおりコリア美術協会の代表である。「呼びかけ文」は四項目からなり、南北間の文化交流と、民団と総聯が今後も共同事業を持つことが明記され

ている<sup>(43)</sup>。ここで注目したいのは「呼びかけ文」を掲載していることなど、他のメディアに比し、『京郷新聞』が文化祭関連の情報を詳しく掲載している点と、文化祭の次の日付の新聞にこれを掲載している点である。海を越えた韓国から少くない関心が注がれていたことがわかる<sup>(44)</sup>。次に共和国の『労働新聞』の記事を見る。

社説 祖国の自主的な平和統一のための在日同胞の愛国運動

南朝鮮における4月人民蜂起一周年に際し、去る18日、在日朝鮮人総聯合会と、「在日韓国人居留民団」の共同開催で東京において在日文化人の「平和統一、南北文化交流促進文化祭」が開催された。政治的見解と信仰や所属を異にする角界各層の在日同胞約2千人が参加したこの集まりでは、外勢干渉を排し、民族の自主的な平和統一と南北間の文化交流を旨とする「呼びかけ文」が採択され、各部門での相互接触と協調を引き続き発展させることで、民族の自主統一と南北交流、そして同胞の統一と団結に寄与していこうという決意が表明された<sup>(45)</sup>。

この『労働新聞』や先の『京郷新聞』から文化祭の趣旨や目的、経緯が南北に正確に伝わっていることがわかる。また『労働新聞』には南で起きた4.19革命とそれに参加した韓国民衆への共感、そして「我が祖国の分裂は海外に住む同胞たちにも大きな苦痛と不幸をもたらしている」という記述からは在日朝鮮人への連帯をも読み取れる。

第一回連立展について最後に以下の記事をあげる。

(41) 在日韓国人記者団と在日朝鮮人言論出版協会については、前掲、朴慶植『解放後 在日朝鮮人運動史』(403ページ)に言及されている。

(42) 『京郷新聞』1961年4月19日付。

(43) 「呼びかけ文」の(四)に「民族の事業について南北間で相互に協商すること」とあるが『朝鮮新報』にもこの時期に民団と総聯の協商が試みられた記事がある。本稿では詳細は割愛するが、文化面のみならず経済での交流があったようである。

(44) 『京郷新聞』以外のメディアでも文化祭に関する記事が載ったようであるが、いまのところ見つからない。

(45) 『労働新聞』1961年4月21日付。



## 感動の中連立美術展開催

総聯、民団美術家たちが手を取り

在日本朝鮮文学芸術家同盟美術部と、在日韓国<白葉>同人会美術部、在日コリア美術協会が主催し、祖国平和統一南北文化交流促進文化祭実行委員会が後援する<祖国平和統一南北文化交流促進連立美術展>が去る1日から東京銀座村松画廊で開催されており、会場には三団体に所属する美術家33人の作品62点が展示された<sup>(46)</sup>。

この記事の「実行委員会」や先の「常設委」（『朝鮮新報』61年4月29日）、「準備委員」（『京郷新聞』61年4月19日）の文化祭での位置づけや役割はいまのところ詳細が確認できないが、文化祭の運営に少なくない人数の人が携わり、ある程度組織的に動いていたことがわかる<sup>(47)</sup>。また、参加者が33人であり、62点の美術作品が出品されていたこともわかる。

以上のように、当時の資料を参考によると、第一回連立展は、1961年4月18日に虎ノ門にある久保講堂開催の「祖国平和統一南北文化交流促進文化祭」の後に開かれた。文化祭を、民団も総聯も、そして朝鮮半島の韓国と共和国も注視していた。後述するが文化祭では演劇も上演され、また文学者など広く文化人も集ったところから、多くの人の期待と関心のなかで開催された。第一回連立展は文化祭の約二週間後である5月1日から5日に村松画廊で催され、文芸同美術部、韓国白葉同人会美術部、コリア美術協会の三団体が参加し、30名ほどの美術家たちが交流を深めた。

## 2-2 第二回連立展の開催経緯、開催期間、参加団体

『画集』によると第一回連立展に続いて、8月

に第二回連立展が開催された。正式名称は第一回が「祖国平和統一南北文化交流促進連立美術展」であったのに対し、第二回は「祖国解放記念16周年記念第二回連立展」であった。また参加団体は、両者とも三団体が参加しているが、第一回は、①文芸同美術部（代表＝韓宇英）、②白葉同人会美術部（代表＝洪久城）、③コリア美術協会（代表＝郭仁植）だったのに対し、第二回は、①文芸同美術部、②白葉美術部、③韓国芸術家協会となっている。参加団体の詳細については、以下の資料が参考になる。

### 8・15 連立展

在日同胞の注目のもと、8月14日から19日にかけて、銀座画廊で開催された。参加者は以下である。

韓国白葉同人会美術部

홍 구성 (ホン・グソン), 림 춘흔 (リム・チュンフン)

在日韓国芸術協会

곽 인식 (クァク・インシク), 정 신 (チョン・シン), 백 희 (ペク・フィ)

文芸同美術部

백 령 (ベク・リョン), 한 우영 (ハン・ウヨン), 허 훈 (ホ・フン), 표 세종 (ピョ・セジョン), 리 철주 (リ・チョルチュ), 전 화황 (チョン・ファフアン), 금 정혜 (クム・ジョンヘ), 리 찬강 (リ・チャンガン), 오 림준 (オ・リムジュン), 고 삼권 (コ・サングォン), 안 천룡 (アン・チョンリョン), 한 동휘 (ハン・ドンフィ), 오 일 (オ・イル), 성 리식 (ソン・リシク)<sup>(48)</sup>

（括弧内は筆者）

最後の「文芸同美術部」は先述のように「在日本朝鮮文学芸術家同盟美術部」のことであ

(46) 『朝鮮新報』1961年5月6日付。

(47) 「実行委員会」については、連立展パンフレットに「後援:祖国平和統一南北文化交流促進文化祭実行委員会」と書かれており、『朝鮮新報』（1961年4月29日付）にも「(5月)21日、朝鮮奨学会会館において出演者代表たちが参加した、実行委員会を開催し、今後統一運動をより拡大強化することについて協議した」とある。『民主新聞』には、当実行委員会が流会となり、韓国芸術家協会が南北交流文化祭実行委員会から脱退したと書いている（1961年6月14日付）。



り、この団体は第一回連立展から変化はない。「韓国白葉同人会美術部」は第一回展に参加した団体である「白葉同人会美術部」と同じ組織だと考えられる。二番目に書かれてある「在日韓国芸術協会」が、第一回連立展には見られない団体名である。構成員を見ると第一回参加団体であるコリア美術協会にもこの在日韓国芸術協会にも郭仁植他二名の名前があることから、同じ組織であるが改称したか、あるいは似たような団体であると考えられる。第二回連立展について『朝鮮時報』は次のように伝えている。

連立美術展盛会  
東京・銀座画廊で

八・十五祖国解放十六周年記念第二回連立美術展は、さる十五日から十九日まで、東京・銀座画廊において盛大にひらかれた。今回の催しでは、前回に引き続き、思想・政見のちがいをのりこえ、祖国の平和統一に向かって、在日朝鮮人美術家たちがさらに大同団結するという意欲がみちあふれていた。作品は33点、20名の画家たちは、それぞれの個性的なテクニックで作品を競った。<sup>(49)</sup>

この記事によると、開催目的が「前回に引き続き、思想・政見のちがいをのりこえ、祖国の平和統一に向かって、在日朝鮮人美術家たちがさらに大同団結」することであることがわかる。参加者について、機関紙『朝鮮美術』には19名の名前しかあがっていないが、『朝鮮時報』には参加者20人という記載がある。どちらが正しいか判別がつかないが、20人前後の美術家たちによる33点の美術作品が出品されたことがわかる。

以上のように第二回連立展は1961年8月15日から19日まで銀座の銀座画廊で開催された。参

加者や作品数は第一回に比し縮小しているが、開催目的や参加グループを参照すると、第一回連立展を引き継ぐ形で開催されたと判断できる。

## 2-3 出品者と出品作品

先述したように「連立展」の参加団体は、白葉同人会美術部、コリア美術協会（在日韓国芸術協会）、文芸同美術部があり、代表はそれぞれ洪久城、郭仁植、韓宇英である。彼らについて現在のところわかっているのは以下の通りである。

洪久城は、『白葉』の表紙を数回手掛けており、それら版画や水彩画で緻密さを垣間見せている<sup>(50)</sup>。またのちに触れるが、第二回連立展にかかわる資料に、「数少い版画家洪久城氏は、その水彩画『花』に、神秘性豊かな表現を駆使している」と書かれてあることから、基本的には版画を制作し、その他の素材も手掛けていたものと推測できる<sup>(51)</sup>。60年前後の『民主新聞』にカットや新聞連載小説の挿絵を描いていた。

郭仁植は(1919-1988)は慶尚北道に生まれ、植民地期に渡日しており1930年代後半から日本の画壇に作品を出品していた。様々な素材の特徴を生かした作品を手掛けた<sup>(52)</sup>。郭も先の洪久城同様、『民主新聞』にカットや新聞連載小説の挿絵を描いていた。

韓宇英（1910 - ?）は、解放直後より在日朝鮮人の美術運動に積極的に参加した人物であり、1960年代初期に共和国に帰国している<sup>(53)</sup>。

第一回連立展について、出品者は、上記代表者以外では以下の通りである<sup>(54)</sup>。

韓国白葉同人会美術部からは金鉄、金泰伸  
 リ・朴 リ・スナム リ・キョン チョン・バク チョン・ホンジキ  
 李北、李壽男、林景、鄭伯、鄭弘子、コリア美  
 チョジンシ キョン・リョンイ ベク・ウィ ファン・チョンドン  
 術家協会からは鄭新、庚童伊、白姫、皇青童、  
 チョン・イルテ ベク・リョン キョ・ファン  
 文芸同美術部からは朴日大、白玲、許燾、  
 ビョ・セジン チョ・リョルチュ チョ・アファワン クム・ジョンヘ  
 表世鐘、李哲州、全和鳳、琴聲瑟、河相結

(48)『朝鮮美術 ニュース』文芸同美術部機関紙、1961年10月1日。

(49) 『朝鮮時報』 1961 年 8 月 26 日付。

(50)『白葉』18号、白葉同人会、1961年8月15日、表紙。

(51) 鄭達鉉「第二回連立美術展をみて」『白葉』20号、白葉同人会、1961年10月15日、27ページ。

(52) 郭仁植『郭仁植画集』三彩社、1962 年及び、菅原猛『現代美術への招待』新評論、1991 年、292-309 ページを参照した。

ハン・ドンフィ キム・インスン キム・フィリョ キム・チャンドク クォン・ニョンイル  
韓東輝、金仁順、金熙麗、金昌徳、権寧一、  
オ・ピョンハク オ・リムジュン オ・イル ソン・リシク チョン・ファフテン  
呉炳学、呉林俊、呉日、成利植、全和鳳が出品した。

第二回連立展の出品者は、各団体代表者に加え、韓国白葉同人会美術部から林春興、在日韓国芸術協会から鄭新、白姫、文芸同美術部から白玲、韓宇英、許燾、表世鐘、李哲州、全和鳳、琴静恵、呉林俊、韓東輝、呉日、成利植、李讃康、高三権、安千竜が出品した<sup>(55)</sup>。

第一回連立展に出品された作品についてはパンフレットに、「静物」(洪久城)、「作品A」(郭仁植)、「三十八度線」(金昌徳)、「百済観音」(全和鳳)、など54点の作品名と作者が掲載されている。また1961年8月15日発行の『白葉』18号や1961年5月6日付けの『朝鮮新報』に会場写真が掲載されており、許燾の「異国に生きる」(1961年作、116×91cm)が展示されていることがわかる<sup>(56)</sup>。そのほかの作品は写真からは判別しにくいだが、花瓶に花がいてあるものなどいわゆる静物画が展示されており、写實的に描かれたものであることが読み取れる。

第二回連立展については、「武蔵野の展望」(林春興)、「作品」(白姫)、「貧しき人々」(呉日)など33点の出品作の作品名と作者がパンフレットに掲載されている。また1961年8月26日付け『朝鮮新報』に出品作品について「とくに「黒の空間」(郭仁植)、「労働者の休息」(許燾)、「生きる」(表世鐘)、「榛名」(白玲)、「吾が子ら」(琴静恵)、「故郷」(呉林俊)などの作品が鑑賞者の目をひいた」とあり、記事に添えられた会場写真から琴静恵の「吾が子ら」、表世鐘の「生きる」が展示されていることがわかる<sup>(57)</sup>。ま

た鄭達鉉(白葉同人会会員。詳細後述)の展覧会評には、「抽象画の郭仁植氏の『赤い太陽』」、「舞台装置家として活躍している李賛康<sup>(58)</sup>氏の「広寒楼之場」の舞台模型」などが挙げられている<sup>(59)</sup>。展示された作品群の共通点について入手できた上記の資料から判断すると、素材は多岐にわたり、また表現方法には抽象も具象もあったものと考えられる。「連立展」の開催経緯や開催期間、参加団体、出品者、出品作品について現時点でわかっていることは以上である。

次節では「連立展」の反響や反応、影響をみていくこととする。

### 3 和やかな交流とその急速な冷却

ここでは「連立展」の影響や反響を、当時の資料を参考に整理する。主な参考資料は前節と同じであるが、『白葉』18号(1961年8月15日発行)に収録されている座談会「祖国平和統一南北交流促進 文化祭を顧みて」を参照するため、論を進める前に当該座談会とその参加者について簡潔に記しておく。座談会の会場についての記載はなく、日時も書かれていないが、『白葉』18号の発行日を参考にすると、開催日は5月の「連立展」後であり、8月に開催された「連立展」より前であると考えられる。内容は、冒頭で文化祭を振り返って数名が発言し、両団体に属す文化人らが時間を共に過ごしたことの意義について話し合っている。続いて、美術展と演劇について感想を述べあい、作品批評の在り方について意見が交わされている。また

(53) 李鏞勲「在日コリアン美術の軌跡」『Neo Vessel』vol.2、AREUM ART NETWORK、2004年、68ページ

(54) パンフレットや機関紙『朝鮮美術』を参照した。

(55) 出品者についてこれまでわかっている情報を簡潔に記す。詳細は注(11)の拙稿をご参考いただきたい。白玲：本名＝朴栄煥(1926-1997)、許燾(1929-2011)、表世鐘(1929-)、李哲州：生歿不詳。初期のころから在日朝鮮人美術活動に関わっていた。全和鳳(1909-1988)、琴静恵(1928-)、李讃康：中央芸術団(現金剛山歌劇団)に初期のころから属し舞台美術を担当した。呉林俊(1926-1973)、高三権(1939-2016)、韓東輝(1935-)、呉日(1939-2014)、成利植(1930-2016)。

(56) 『画集』に許燾の同作品の写真が収録されている。

(57) 第二回連立展出品作品についてもその一部が上記と同じく『画集』に収録されている。

(58) 「李讃康」のことであると考えられる。

(59) 鄭達鉉「第二回連立展をみて」『白葉』第20号、白葉同人会、1961年10月15日、26-27ページ。

このイベントに対し朝鮮半島でどのような反応があったのかについて、そして今後の継続的開催の可能性が話題に上がっている。出席者は許南麒、金達寿、申鴻湜、張徹、崔鮮、安道雲、鄭達鉉、趙尚洙、金泰伸、そして司会を金慶植が担当している<sup>(60)</sup>。

### 3-1 相互交流の活性化

「連立展」は朝鮮半島の平和統一と文化交流の促進を目的に開催され、解放後16年を経て初めて総聯と民団が共同で開催したという点で意義あるものであった。同展覧会の反響はどのようなものだったのだろうか。

「観覧客の中には、学生、女性、商工人、労働者などあらゆる層の同胞たちが、絵画よりも民族の団結の雰囲気に入り、長時間会場に留まっていた」<sup>(61)</sup>との記事から、展覧会の会場には少なからぬ鑑賞者が足を運んだことがわかる。また、絵画の見方はわからないが、総聯と民団が展覧会を開催するというから喜んで来たという人の話や、これまで歴史に無関心だった人の関心と呼び寄せたことや、美術家各自が手法は異なれども、何かを求める熱意と真摯な態度の共通性に、敬意を表すという評論家の発言が紹介されている<sup>(62)</sup>。

「連立展」よりも前に日本アンデパンダン展で在日朝鮮人の美術家の作品を見ていた金達寿は、民団の美術家と中立の美術家の作品を見て、日本人と比較しても「立派なものだった」と評し、「こういう交流もいままでなかった」<sup>(63)</sup>と惜しんでいる。また許南麒は

最初は白葉の美術部とかあるいはコリア美術

協会の方たちの描く絵はアブストラクトとかそうじゃなければシュールレアリズムだけだろうとかというふうな先入観があった。もっともそういう作風もあったんですよ。けれどもそうじゃない作品が半数以上占めているんだ。それで絵の場合、そうすると本質的には、両方の間にはそう大きな問題はないんじゃないかというようなことを感じましたね。(中略) そういう点でいけばもっと僕は、むずかしいだろうと思った絵でさえも一つになるということが非常にやさしいのじゃないか<sup>(64)</sup>。

と発言しており、ここから、展示された作品は鑑賞者の期待を上回るものであったと想像でき、手法上の差異も抽象か具象かの違いはあるが、それほど異なっていなかったのではないと思われる。また、「やはり文学、美術のジャンルの人々の集まりですから、やはり作品というもの論じられなければ私はうそだと思ふんです」<sup>(65)</sup>(申鴻湜)、「批評までもって行くと云う問題ですが(中略)遠慮なくそれを批判し、批評する前に、我々はこういったものをやらなければならない」<sup>(66)</sup>(司会：金慶植)と、批評の話にまで話題が広がっていることから、作品展示自体は満足のいくものだったのだろう。白葉同人美術部の洪久城は「連立展を終えて」という文章のなかで、

われわれ画家同士の心と心とが、一枚一枚の絵を通して肉体の奥から湧いてくるそれぞれの声を充分に出し合い、会場一杯広げた情

(60) 座談会参加者について簡単に整理する。許南麒(1918-88)：文学者。金達寿(1919-97)：文学者。申鴻湜(1905-94)：朝連の時代から在日朝鮮人の活動に参加した。張徹：詳細不明。崔鮮(1918-68)：詩人、評論家。対談の中で、申鴻湜と朝鮮奨学会で三年間一緒だったという旨の発言をしている。安道雲：演劇家。鄭達鉉：文学者と思われる。趙尚洙：詳細不明。『白葉』19号には氏の紹介として「ユリヤニュース」と書かれてある(1961年、32ページ)。金泰伸：美術家。『白葉』の表紙を何度か手掛けている。60年前後に『民主新聞』のカットも描いている。同同人誌には金の個展に関する情報がある。金慶植：文学や批評を専門にしていたと思われる。崔鮮死去のあと、『背理への反抗』(新興書房、1968年)を編集している。

(61) 『朝鮮新報』1961年5月6日付。

(62) 『朝鮮新報』1961年5月6日付。

(63) 座談会「文化祭を顧みて」での金達寿の発言(『白葉』18号、白葉同人会、1961年8月15日、12-13ページ)。

(64) 座談会「文化祭を顧みて」での許南麒の発言(『白葉』18号、白葉同人会、1961年8月15日、13ページ)。

(65) 座談会「文化祭を顧みて」での発言(『白葉』18号、白葉同人会、1961年8月15日、12ページ)。

熱の五日間は爽快そのものであった。こんな楽しく意義深い催しを、何故 15 年間、君も僕も持てなかったのだろうか、と思えば残念このうえもない<sup>(67)</sup>。

と綴っており、出品者自身もこの催しに十分な達成感を感じ、これまで交流がなかったことを惜しんでいる様子がかがえる。

第二回展覧会については鄭達鉉の展覧会評が参考になる。鄭はここで、第一回連立展よりも会場も狭く、出品数も減っていると指摘<sup>(68)</sup>し、「これと云う大作はないが、手頃な大きさなので、むしろ親しみ易いし、静寂な安定した空気をただよわせていた。(中略)内面的な反省と、苦心をなめてきただけに、作風と思考表現に落つきが出たように思った」<sup>(69)</sup>と述べており、短い期間ではあるが、新たに作品を描いたか、これまでに描いた作品で、第一回連立展に出品していないものを出したと考えられる。テーマ作品の出品を控えたのかもしれない。このような変化について金泰伸の発言も興味深い。

まあ私文芸同の美術部の友だちらとは前からつき合っている人もおりますがね。最初そのアンデパンダンで受けたときの感じとその後を受けた感じとはそのポーズとか構造というかなんかあまりにも作品そのものから離れたような記録画をかくような感じを受けたんです。(中略)一応文化祭の場合には作品を本位とした文化祭をやればどうかということを仲間同士では一応話がきまったんです。(中略)申先生もこういうタイトルはあまり強過ぎるじゃないかという様なことを私聞いたんです。(中略)文化祭のためにかいたのは少ない

でしょう(中略)。連立展の場合にはただ案外まじめにね、やはり連立展のためにかいたというような印象が作品で見受けられました。(中略)アンデパンダンに出すときのようなテーマの作品だったとすれば、そういった作品には彼らのやるという個性ということが多少見受けられたんですが、なんか物足りないような感じでした<sup>(70)</sup>。

ここからわかることは、金泰伸が白葉同人会に属しながらも文芸同美術部に属する美術家らと以前から接触しており、作品を「日本アンデパンダン展」を通して見たことがあった点である。また「記録画のような」と述べているのは、おそらく文芸同美術部の「テーマ制作」のことである。第一節でも少し触れたが、同部は1957年から共通のテーマで作品を描き始め、それを1959年に大挙「日本アンデパンダン展」に出品していた<sup>(71)</sup>。ここでの「記録画」とはその一連の作品を指していると考えられる。さらに金泰伸は、このようなテーマを描いた作品のときには彼らの個性が見受けられたのだが、「連立展」での作品からはそれが見受けられず、「物足りないような感じ」だったと述べている。文芸同美術部との接触を以前から持っており、その時から彼らの作品には違和感があるので、共同の展覧会ではそのような作品の展示は避けたいと申し出たが、実際展示されたものを見ると、先方の個性が感じられなかったと率直な意見が述べられているのだ。このことから共同で展覧会を開催した相手側の美術を理解しようという努力が垣間見え、一方で文芸同美術部も展示の方向性に対する白葉同人会の意見を受け入れたようだ。先の鄭の展覧会評を踏まえても、

(66) 同上。

(67) 洪久城「連立展を終えて」『朝鮮美術』七号、文芸同美術部、1961年5月、80ページ。

(68) 鄭達鉉の該当文章には、「出品作品の数も54点から33点にしばられている」と書かれてあり、第一回連立展の出品作品数が62点だったと書かれている資料(『朝鮮新報』61年5月6日)と若干の誤差がある。どちらが正しいのかはいまのところわかっていない。

(69) 鄭達鉉「第二回連立展をみて」『白葉』20号、白葉同人会、1961年10月15日、26ページ。

(70) 座談会「文化祭を顧みて」での金泰伸の発言(『白葉』18号、白葉同人会、1961年8月15日、14ページ)。

(71) テーマは「在日朝鮮人の生活」、「帰国」、「南朝鮮の救国闘争」であった。



提供する作品の点で両者に間にある種の歩み寄りがあったと考えてよいだろう。

「連立展」の前に開催された「文化祭」について、開催前から観衆の関心をひいていた様子が以下からうかがえる。まず金達寿の発言を引用する。文化祭に足を運ぶ在日朝鮮人の民族感情について「初歩的」あるいは「素朴な」民族の感情であったというやり取りのなかで出たものである。

朝鮮料理屋と称するところへ行ったわけです。そうしたら、そのうちはいわゆる居留民団系なんだ。(中略) まず何を言うかという、あした統一するんだそうですね、こういうわけなんだよ。(中略) 考えてみると笑ってすませる問題じゃないんだね<sup>(72)</sup>。

続いて安道雲は、当日上演された演劇について、初めて会う人たちが当日どうやって一つの作品を作っていくのだろうと心配したが「不思議にも何か先の意識的に統一をしようというところはないでしょうけれども、何かお互いにすごくなごやかな気持ちになってすごく仲良くなったということ」<sup>(73)</sup>と綴っている。この二人の発言から、文化祭を心待ちにしている一般の在日朝鮮人の様子や、期待と不安を抱いている関係者の準備状況や心理がうかがえ、それが消極的なものではなく、彼らが積極的に文化祭を待ち望んでいたことがわかる。この演劇については、文化祭当日上演された演劇のタイトルが「黒い足跡」、「黒い目」であり、前年の4.19革命を題材にしており、創作の意図について詳細に語られた文章もある<sup>(74)</sup>。本稿が美術に焦点を当てているため詳しい内容は割愛するが、合同文化祭に続き、7月22日に山野のホールで左右演劇人合同勉強発表会を持ち、8.15祖国解放16周年記念合同文化

祭で「今迄の疑惑の雲を吹き払い、これからの演劇のありかたを強く感じた」と述べている部分からは、「連立展」が第二回連立展へとつながったのと同様、演劇の部門でも4月の文化祭に続いて7月に勉強会、そして8月にも交流を持っていたことがわかる。文化祭の一定の成功を物語っていよう。

文化祭に続く「連立展」が終わると、総聯傘下の新聞には以下のような記事が掲載されるようになる。

#### 郭仁植個展

郭仁植個展が、さる七月二十四日から二十八日まで、東京銀座の中央画廊で開かれた。作品は「時の空」九点で油絵。郭氏は日本における祖国平和統一南北文化交流促進文化人会議実行委員の一人である<sup>(75)</sup>。

#### 洪久城個展

東京・竹川画廊

「白葉」同人会美術部洪久城氏の個展がさる二十一日から東京銀座の竹川画廊でひらかれた。作品は油絵「僕はさか立ち、妻は太鼓」ほか日本版画協会賞を受賞した版画「顔」など計十三点で、好評をばくした<sup>(76)</sup>。

郭仁植（在日韓国芸術協会）、洪久城（韓国白葉同人会美術部）の美術展を総聯傘下の新聞で紹介していることから、二回の「連立展」を通して、組織の枠組みを超えた美術家たちの交流が可能となったことがわかる。「連立展」は、日本に住む朝鮮半島にルーツを持つ植民地を経験した朝鮮人であり、且つ美術家であるという共通性によって、言葉を尽くさずとも通じ合う何かが相互にある人々の展覧会であったために、これに参加した在日朝鮮人美術家たちは感じるが多かったのだろう。

(72) 座談会「文化祭を顧みて」での金達寿の発言（『白葉』18号、白葉同人会、1961年8月15日、15ページ）。

(73) 座談会「文化祭を顧みて」での安道雲の発言（『白葉』18号、白葉同人会、1961年8月15日、17ページ）。

(74) 安道雲「『黒い足跡』のあゆみ」『白葉』20号、1961年10月15日、20-22ページ。

(75) 『朝鮮時報』1961年7月29日付。

(76) 『朝鮮時報』1961年11月25日付。

### 3-2 成功とその余波

このような成功の一方で、一連の事業の終了後、白葉同人会代表の崔鮮が、総聯系芸術家らと接点を持ったこと、文化祭を開催したことを理由に、民団から除名処分を言い渡されている。これは、9月20日のことで白葉創刊四周年記念文化祭の開催日の前日である。詳細は『白葉』21号に掲載されており、除名措置に対して崔鮮は長文で抗議している<sup>(77)</sup>。また金一勉<sup>(78)</sup>は南北文化人懇談会を皮切りに民団系と総聯系の文化人が交流したこと、それによって白葉同人会も、同人誌が当初は論文のみ掲載されていたのに、いまや「演劇人、音楽人、画家たちが相寄って力量と意義を発揮するに至った。すなわち『白葉』は民団の一角の文化人たちのエネルギーを散发する場を作った。と同時に祖国平和統一運動となった。(中略)『白葉文化祭』を催すまでになった」<sup>(79)</sup>と述べ、「所が、『白葉文化祭』の行われる当日夕六時、会場の豊島公会堂前に、一群の暴力団が現れた。(中略)企画は－“平和統一運動をやっている白葉同人会「崔鮮一味」は「赤の手先」となって「朝総聯に踊らされ」「利敵行為」をやっているから、これを追い散らす”ことにあった」と述べた。加えて、白葉同人会に所属した洪久城も、「今度の文化交流会に当って、民団側の一部の報道において遺憾な点を指摘したい。『南北文化交流に参加したる主導者を、規約に基いて処分』云云や、私の顔も知らない筈なのに、『文化祭に不参加の署名を民団にした』などと、根も葉もないことの記事をみた」<sup>(80)</sup>と文化祭をはじめとした白葉同人会の活動に対する民団の対応を強く批判している。当時の新聞からは、民団

が組織的に文化祭開催前から総聯系の文化人らとの接触を否定していることがわかる<sup>(81)</sup>。また白葉同人会の活動についても文化祭を境に厳しく監視していたと考えられる<sup>(82)</sup>。体調を崩した崔鮮を引き継いで白葉同人会の主幹を務めた韓郁は、民団の対応、そして接触が消極的になった文芸同に対する失望を抱えており、次のように述べている。

(崔鮮は)白葉とともに耐えがたい風雪に耐え貫き今日に至ったが未だに南北交互が醸し出す処の思想的葛藤や矛盾の処理に妥当性を見出せずにいる。(中略)祖国統一の現実の不条理な現実をつくり出す処の矛盾と妨害をえぐり出し統一運動に積極的且つ大胆に進みたいと意を新たにす次第である<sup>(83)</sup>。

韓郁は、崔鮮を筆頭に白葉同人たちは祖国統一のためにのみ奔走したと述べ、同号で文芸同美術家が大阪で開催される予定だった「連立展」を流会にしたと批判し、また民団が白葉同人会の会員が進めている統一運動を否定していることに対し憤慨している。第二回開催後の資料をみても、第三回につながったことを記したものはいまのところ見つからない。『朝鮮新報』など総聯傘下のメディアに崔鮮除名や文化祭の混乱について書かれた資料も見つからないが、総聯側の芸術家らも民団系・中立系芸術家らと共同で文化事業を進めていくことに対し何らかの理由で意欲は薄れていただろう。同じ会場で作品を並べ、今後の相互批評の可能性まで討議し、朝鮮半島の統一を素朴に願っていたにもかかわらず、両者の共同行動を阻む矛

(77) 崔鮮「私こそ権逸を除名する－民族裏切者たちに対する私の回答－」『白葉』21号、白葉同人会、1961年11月15日、2-22ページ。

(78) 金一勉：以前は朝連に所属していた小説家。(宋恵媛「在日朝鮮人文学史」のために)岩波書店、2014年、236ページ参考)。

(79) 金一勉「白葉文化祭における暴力徒始末記」『白葉』21号、白葉同人会、1961年11月15日、30-31ページ。

(80) 洪久城「連立展を終えて」『朝鮮美術』7号、文芸同美術部、1961年5月、80ページ。

(81) 「総連との接触は慎重に 中央監察委が警告」『民主新聞』1961年4月12日付。

(82) 『民主新聞』(60年9月28日付)には「『白葉』創刊三周年記念祝賀会開かる 各界有志、百余名が参加」という見出しで、文化祭開催以前は崔鮮を中心とした文化活動を肯定的に評価している。

(83) 韓郁「主幹に選ばれて」『白葉』第26号、1965年5月15日、9ページ。

盾に美術家らは深く絶望しただろう。

## おわりに 未完の夢と継承の可能性

本稿では、これまであまり知らされていなかった「連立展」の実態を、当時の史料をもとに解明した。「連立展」は、4.19革命を契機に民団と総聯の美術家が合同で開催した美術展である。一回目は5月に東京銀座の村松画廊で、二回目は8月に銀座画廊で開かれた。参加団体は文芸同美術部、白葉同人会美術部、コリア美術家協会（第二回は韓国芸術家協会）の三団体であった。同年に在日朝鮮人の文学者や演劇家が主催した文化祭が開催されており、「連立展」が、在日朝鮮人文化人たちの活動が盛りあがりをみせていた時期に開かれたものであったことも本稿で確認した。

新聞記事を見ると、『民主新聞』、『朝鮮新報』で取り上げられていた。朝鮮半島の南北では『京郷新聞』及び『労働新聞』には文化祭の情報とその意義について書かれた記事が掲載され、在日朝鮮人の文化活動の隆盛に対する理解と連帯の意思が表れていた。

また、『白葉』に掲載された座談会から、参加者らが合同事業を通して素朴な感情のやり取りがなされたことに喜びと希望を抱いていたことがわかった。特に美術家らの作品は、その表現に具象と抽象の差が見受けられ、二回目の「連立展」では一定の歩み寄りがあったことも明らかになった。

同展の特徴は、順位を競うものでもなく、賞が設けられたものでもなく、また共通した画風を持つ美術家たちの展覧会でもないというところにある。朝鮮半島の平和的統一と南北交流を願う朝鮮人美術家という部分のみが、この展覧会に出品した美術家たちの共通点である。視覚に訴える芸術作品に重点がおかれるのではなく、むしろ作品を提供している人の間に共通点があるという状況が、当時の在日朝鮮人に影響を与えていた。

美術家らが抱いた希望と手応えゆえに「連立展」終了後の両組織の不接触について、美術家たちは深い失望を抱いたに違いない。同展は1960年の4.19革命を契機に開催されたことは本稿で触れたとおりだが、韓国ではこの革命が起点となって民衆文化運動が大きく発展した<sup>(84)</sup>。在日朝鮮人の文化活動が活気を帯び始めたのが韓国と同時期なだけに、在日朝鮮人文化活動が1961年の盛り上がりののちに急速に縮小していった事実は、現在振り返っても残念である。先の「板門店宣言」を受けて朝鮮半島の南北間では、スポーツ分野での交流や経済活動、陸路の整備などが進んでおり、近い将来在日朝鮮人の芸術家に新たな歴史の創造が期待されるこの時期に、本稿で述べた「連立展」の成功と経験が少なからず参考になるだろう。

今後の課題は以下の二点である。第一に「連立展」開催の時代的意義を解明する。この時期は、朝鮮戦争停戦による混乱や余波が続いていた時期であり、四年後には日韓基本条約が締結された。この空隙の時期は朝鮮半島の分断が現在ほど固定化されておらず、そのため異郷の日本でこそ民団と総聯の和解や朝鮮半島の統一に向けた活動をする可能性があったものと考えられる。

第二に、当該時代の在日朝鮮人美術について、民団や総聯に属している美術家たちは個がいかに抑圧され埋没されたように思われていることに対する筆者の違和感を解消したい。本稿第一節でも少し触れたが、芸術家一人一人の作業が集団の方向性に連関する50年代の日本の状況に関する先行研究を参考にしながら進めていきたい。

(84) 古川美佳『韓国の民衆美術 - 抵抗の美学と思想』岩波書店、2018年、7ページ。